

おもてなしのころ

豊田工業高等専門学校5年（愛知県）

加藤 瑠夏

私が茶道を始めたのは小学2年生の時でした。近くの公民館で茶道教室が行われているという情報を母親から聞き、最初はお菓子が食べられるからという理由で通い始めたのを今でも覚えています。それが現在も学校の部活動として続けているのですから、13年も茶道のある生活をしています。今では日常生活の一部として、なくてはならないものとなりました。

私が今でも茶道を続けているのにはいくつか理由がありますが、その一つはお点前の雰囲気が好きだからです。私は小さいころから人と何かを競うことが好きではありませんでした。物事を器用にこなすことがあまり得意ではなかったため、何事も自分のペースで静かに丁寧にやりたかったのです。そんな私にとって茶道というものはぴったりでした。一つ一つの動作を丁寧に、そしてなめらかに行うことは私にとってとても心地良いのです。また、それぞれの行動や順番にきちんとした理由があることにも美しさを感じます。うまく言い表せないのですが、静かで緊張感のある、それでいて和やかな雰囲気もある茶道のひとつときは忙しい日常生活を忘れさせてくれます。

茶道というのは、抹茶が綺麗に点てることができればそれで良いというわけではないように感じます。「完成した抹茶」という結果だけでなく、それを点てる「お点前」という過程も大事なのが茶道だと考えています。

13年も茶道を続けていると、少しおこがましいですが、お客さんに合うおいしい抹茶を点てられることが私の特技の一つと呼べるものになりつつあります。私は一昨年、ハンガリーにて約11か月の留学を経験しました。留学の目的は異文化交流ですから、海外の文化を体験するとともに、日本の文化を広めなければなりません。その点において、茶道は私の大きな強みになりました。その頃、茶道をやっていたということが私は日本人であるという誇りになっていた気がします。茶道という文化は、私のアイデンティティと深く結びついているように感じます。留学に行く前に、部活動の茶道の先生がこうおっしゃいました。

「茶道は見立てで良いからぜひ文化を広めてきてくださいね」と。この言葉は今でも私の心の中に残っています。お茶碗はスープのボウル、お釜はティーポッド。何もすべての道具を日本から持っていく必要はなく、抹茶と茶筌さえあればあとの道具は他の物で見立てればよいのです。茶道において道具はもちろん重要ですが、人をもてなす気持ちがあればいつでもどこでもできるのだと感じました。いつからかお菓子を食いたいという気持ちよりも、お客さんをおもてなししたい、楽しませたいという気持ちが強くなっていました。そんな私にとって良い機会が年に一度の学園祭です。普段の部活とは異なり、着物を着て部活の仲間ではない人にお茶を点てることのできる数少ない機会です。性別、年齢問わず多くの人に提供することは、やりがいはもちろんのこと気持ちが高揚する瞬間です。私たち学生のお点前を見て「すごい」と言ってくれる方々。抹茶を飲んで「おいしい」と言ってくれる方々。小さいお子さんが試しに

飲んで「苦い」と笑いながら言っている姿でさえも私にはうれしく思えます。とにかく茶道というものを多くの方々に知って経験してもらいたい、その時間を楽しんでもらいたい、という気持ちが私の中に強くあるのです。

私はあと1年もしないうちに今の学校を卒業しますが、茶道はこれからも続けていくつもりです。抹茶、茶筌、お湯、そしてなによりおもてなしの気持ちがあればどこでも茶道はできるのですから。